

### 口腔病理専門医講習会 III (細胞診)

【演題】 口腔領域細胞診 ―組織像から細胞像へ―

【講師】 藤田 修一 (長崎大学生命医科学域 (歯学系) 口腔病理学分野)

細胞診を志す病理医が細胞診を学ぶ上で、最も困惑するのは組織像と細胞像の乖離であろう。例えば、唾液腺 Warthin 腫瘍の腫瘍細胞は組織学的にはリンパ組織を裏装する柵状配列の円柱上皮としてみられるが、穿刺吸引細胞診では核間距離の均一な平面的なシート状配列としてみられる。これは検体の採取・処理方法の違いや観察している方向が異なることで起こる。細胞像と組織像の乖離は口腔粘膜の擦過細胞診でも起こりうる。また、細胞診からは組織学的構築を明確に把握できないことが多いために、得られる情報量が組織診より少ない。口腔病理医は口腔病変の組織像に精通しているにもかかわらず、細胞診での限られた情報や組織像との相違が、細胞診の活用や細胞診技術向上の障壁になっているのであれば残念なことである。本スライドセミナーでは口腔粘膜の擦過細胞診や唾液腺穿刺吸引細胞診の基本的な細胞像を供覧し、組織像との関連を念頭において解説したい。

【Title】 Oral cytology – from histological features to cytological appearances -

【Lecturer】 Shuichi Fujita, Dept Oral Pathol, Nagasaki Univ Grad Sch Biomed Sci

When oral pathologists learn cytology, they often feel confused about discrepancies between histological findings and cytological appearances. The discrepancies are due to the different sampling methods, procedures for the specimens and direction of observation between both examinations. Moreover, cytology hardly provides histological construction of the lesions. It is regret that some oral pathologists don't utilize cytology because of the discrepancies and the limited findings. In this slide seminar, I'll show the basic cytological pictures of oral epithelial dysplastic lesions and salivary gland tumors, and explain their characteristic features making correlations with histological findings.

#### 【略歴】

1985年3月 九州大学歯学部卒業

1985年4月 長崎大学歯学部助手

2002年4月 長崎大学医歯薬学総合研究科口腔病理学分野助手

2005年10月 長崎大学医歯薬学総合研究科口腔病理学分野助教授

2007年4月～現在 長崎大学医歯薬学総合研究科口腔病理学分野准教授

(2001年7月 日本病理学会口腔病理専門医、2003年12月 日本臨床細胞学会 細胞診専門歯科医)